

「くしろの木材で活力を」

丸善木材株式会社 代表取締役社長 鈴木 不二男

URL <http://www.maruzenmokuzai.com/>



今月は、釧路管内の木材産業を肌で感じようと厚浜木材加工協同組合を訪ね、協同組合の理事である丸善木材株式会社鈴木不二男社長に活力ある木材産業の現況を色々とお聞きすることができました。社長のお話しされた内容を紹介します。

■森林資源活用円卓会議

釧路市の森林面積は阿寒町、音別町との合併によって約10万haを有し、市の中では全道3位、全国9位の森林都市になり、市域の74%を森林が占めています。そこで、釧路市ではこのような現状から地域材利用の拡大をしようということで、「森林資源活用円卓会議」という組織をつくりました。その中で私が座長となりましたが、川上から川下までということで建築屋、設計屋、素材生産業者等29の団体に入っていた色んな勉強会、見学会、素材生産現場見学会をしています。また、釧路市の工業技術センターの指導も得ています。さらに林産試験場からも接着の指導や木材の強度を打音で測るなど研究員が来て勉強会を開いたり、そういう形で進んで来ています。その会の中では、カラマツを使った家具とか学童机、地域材を使った釧路市の子育て支援センター、消防署の建設や音別町の自転車置き場などをつくっています。

円卓会議メンバーが所属する釧路建具家具生産協同組合ではカラマツの天板などをつくり、少しでも家具にカラマツを使ってもらおうとの狙いから、釧路の家具屋さんに見てもらうために7月11日に工業技術センターでフォーラムを開催しました。お陰様で大変好評で、盛会裏のうちに終えることができました。カラマツのPRは大いにできたと思っております。



森林資源活用円卓会議

■カラマツへの取り組み

釧路管内はカラマツが資源的に多く、パイロットフォレスト等の取り組みにより27千haを有しています。カラマツには力を入れており、「円卓会議」の開催や「釧路・根室木づなプロジェクト」の取り組みを通じ、木材の勉強、視察等の研修を進めています。

カラマツの取り組みが今まであまりされていなかったということではないんですが、網走も十勝も付加価値を上げるために、有効利用を図るようなことはしていませんでした。北見もそうですが、それでも北見は集成材工場、家具、玩具等は進んでいました。ようするに、カラマツを使わずトドマツを使っていました。

私共丸善木材(株)は昭和47・8年からカラマツの取り組みをしており、杭丸太から製材までやっています。円柱加工、防腐処理、フェンスを作ったり色んなことをやって来ています。そのカラマツがだんだん大径化して来ますから、それを乾燥して色んな公共工事や四阿などに使っています。それ以上の太い丸太になると軸組の10.5cm角、梁等の建築材をつくれます。そのための30cm以上の原料を集め、心去りの角、梁をつくり高温乾燥をし、モルダーをかけて出荷します。自治体の設計はほとんどそういう設計になっていますから、今のところ丸善木材とか厚浜木材加工協同組合とかが一歩先んじています。



厚浜木材の加工場

お陰様で十勝方面をはじめ、各地から注文が来ます。ただ、技術をもう少し上げ小径木で狂わない材料をつくるためには、林産試験場の力を借りる必要があります。去年もやりましたが、200本くらいの心持ち角材をムダな材積にはなるんですが、10.5cm角を採るのに12cmに挽いてそれを高温乾燥し、ある程

度の養生期間を経てまた乾燥してと3回ぐらい乾燥しますが、それをモルダールにかけて10.5cmに仕上げたら心持ちでも狂いませんでした。



カラマツ心持ち材

その材料を林産試験場にも供試木として提供しましたが、当方でも50本くらい何かに使ってみてくれというので使いました。今年は林産試験場に丸太を持って行って挽くのと、こちらで加工してやるのと2つの方法を考えており、なるべく林産試験場のお手伝いをしようと考えてはいます。林齢的には30~34年生くらいで12cm角が1本採れば良いと思います。

■くしろの地材地消

くしろの地材地消の取り組みはかなり進んでいます。私が手がけた中で、釧路市では市有林材を使って公共施設を、各町村では主に平屋の木造公営住宅を建築しています。土地があるので高層にしなくても良いという考えです。

私のところはカラマツに特化して地域材を使うという考えです。それぞれの町で生産された丸太を利用して軸組に使う。そういう形をとっていくことが、その地域にとってもプラスになるということです。それぞれの町村で伐採したものをその町村の建物に使うという考えですが、その材がどうしても心持ちになってしまうというのであれば、私どものグループである厚岸木材工業で集成材にします。例えば横架材は集成材にするということになります。



カラマツ集成材

■厚浜木材加工協同組合とは

厚浜木材加工協同組合は、昭和58年に10社によって設立されました。この狙いには大きな考えがあったと思いますが、初代の理事長、副理事長がこの厚岸・浜中地区に製材工場をやっても成り立たない。今までは成り立ったかもしれないが、将来成り立たないという考えで協同組合を作りました。協同意識で出資して製材の部門と原木の部門を作りました。ここは道有林の多い地域ですから厚岸の道有林の立木を活用するため厚岸に製材工場が設立されていました。しかし、小さな製材工場も成り立たなくなってきたので、組合として活動していかなければならない。というのが、一つの考え、目的です。

それに対して当時は国の補助もありましたから、それを利用して施設をつくり、機械を入れ設備投資しながらやって来たということになります。もし組合を作らずそのままにしていたとしたら、1社ぐらいが残って後は全部は廃業、倒産ということになったと思います。分担をきちんとしています。厚浜木材加工協同組合というのは、元々厚岸木材工業協同組合が先にありましたから、その組合員がそっくり厚浜木材加工協同組合員になったということになります。昭和57年頃北海道の方から、予算を組んだが景気が悪くてどの組合も設備投資をしようとするところがない。何とか組織を作ってこの浜中の茶内で何かをやってみてはどうかということになりました。このような経緯から、まずログハウスからやろうかということになったのが、厚浜木材加工協同組合なんです。

ログハウスというのは、その頃建築物として認められていなかったんですが、私どもの設計事務所で構成されている北海道木質構造開発協議会という組織に努力していただいて、認定を受けることが出来ました。このログハウスについては、だんだんアメリカ等から入って来るし、そのような中で競争が激しくなってきた、メンテナンスの問題もありますからログハウスだけでは厳しくなりました。いずれにしても、たまにしか注文が来ないものは商売としてやってられないというところでした。

校倉工法というのは神社・仏閣等をヒノキで造るなど大昔から工法はありましたが、林産試験場が中心となり、昭和60年に「北海校倉ハウス」として建設大臣の一般認定を受けました。林産試験場が一番最初に造りましたから、我々もそれを見ながら機械を開発しました。林産試験場と変わった造り方で、楕円形の円柱、まん丸だと広く見えないので楕円形にすると幅広く見えるからそれを差別化しています。フィンランドではやっていて、たまたまフィンランドに行ってきた人の写真をうまく利用して参考にして造りました。それが、厚浜木材が先駆的役割を果たしたようなことに

なります。これをどんどん進めながら、関東一円、富士山の麓のあたりにも相当建てました。

■ログハウス建築の回顧

横浜市役所発注のログハウス、これも横浜のゼネコンの下請けでやりました。設計については、横浜の設計事務所が落札しましたがきちんと書けないので、釧路の設計事務所に委託して設計図を書き、当社が行ってログハウスを建てました。釧路で建具を全部作り、ログの部分はここで全部作って厚浜木材と丸善木材の従業員が行って完成させました。次の年も指名されて1カ所やりました。バブルが崩壊したら急に単価も下がって大変でした。そういう時代でした。

いかにカラマツの付加価値を高めるか、そのカラマツを植えてきた一般の民有林の人たちから少しでも高く丸太を買うか、それが目的でした。地域の森林資源を育ててきた人たちに少しでもお金が回るようにする。そのために補助金を入れてもらって建物を造ったというのが原則です。



ログハウス・富良野市のホテル

ログハウスは良い時代がありました。他所と差別化ができました。しかし丸太の欠陥が出てきましたから、今度は丸太ではなく角で造った校倉ハウス、角ログに力を入れました。角ログだと完全に乾燥室に入れて、その後加工しますから狂いを防ぎます。それをあちこちに建てました。それでもやっぱり割れが入ったりするということで、集成材化して2材面貼り合わせの集成材を校倉にして組み立てる方法をやりました。これは完全に乾燥されていますから、狂いもなかったです。

ちなみに、昭和62年このログハウス（厚浜木材加工協同組合事務所）に皇太子殿下（現在の天皇陛下）が寄りまして、ここで休憩されていきました。全国育樹祭に来られ、別海、根室を見て、当時の横路知事がこの建物を知っていたので、鈴木さんのところのログハウスがいいということになってここに来ました。25分ほどの休憩でしたが、大変だったです。警備もものすごかったし、思想調査もやりましたし工場内の調査などいろいろやりました。今となっては良い思い出です。

出です。

■カラマツとの関わり

カラマツがだんだん大径化していく中で、これだけ北海道にカラマツを収集する製材工場、梱包工場が沢山ありますが、未だに30cm上が工場にどんどん入ってきた場合にどのように利用するかという考えを持っていません。大量生産、コストダウン、そして安い製品の梱包材を作る。太い丸太はどこかに入れてしまう。極端に言うと22・24cmの丸太がm³あたり9,000であれば、32cmの丸太もm³ 9,000円、そうしたら今まで植えて来た人、長い間手塩にかけて木を植えて来た人たちが32年生のカラマツも60年生のカラマツもm³単価が同じであれば、次代の人は植える気がしなくなっているということです。

そこで、国・道の金を導入して網走管内に某会社の合板工場が出来ました。ただ、合板工場を造って大径木を利用する一つの手法というか、それは解決しました。しかし、丸太を高く買ってくれるのかということになると大きな問題が出てきました。また、そこに大きな工場が出来ると、十勝管内のカラマツ専門工場の会社あたりは自分たちの原木が合板工場にとられてしまったら大変だということで、棲み分けをしようということになりました。24cm以上は合板工場、24cm下はカラマツ製材工場に入るようにしてと提携的なものはやってきました。そのようにやってきましたが、東北の方に商社がみんな持って行くようになったから、合板工場もそれなら私もということで20cmも22cmも買うようになりました。ただ、価格としてはやっぱり相変わらず安かったです。また、在庫が増えてくると買い入れストップというようなやり方をしていました。丸太の値段は30cm以上は当然違うんですが、カラマツ工場に入って行く丸太は同じ値段です。カラマツ工場は欲しくないのに持って来たんだから、持って帰ってくれということになります。それでなければ単価はうちに任せてくれということになります。それをまとめて、ある程度の量になったら私のところに買ってこないだろうかと電話が来ます。



カラマツ心持ち材

今カラマツの状況としては、在庫はみんな持っています。去年は国有林もトドマツの人工林を相当伐りました。地球温暖化の関係で2012年度が森林整備の最終年度で相当力を入れました。カラマツよりもトドマツの方が多かったです。ヨーロッパの材料はユーロ安、アメリカも円高で安く入ってきました。だから山の丸太の売れ行きも良くなかった。今年はカラマツを伐る年ですから、今度はトドマツが少ないんです。国有林が今までカラマツを植えていませんから、これが一つのネックになっています。民有林はカラマツを植えていますが、将来的には枯渇する可能性はあると思います。資源がうまくつながっていないかもしれません。カラマツも太くなってきてますから、梱包材用の丸太が不足しています。太くなり過ぎ、道南のスギと同じです。誰も扱う人がいないうちにどんどん大きくなって行き、自治体の町長、村長さんも何とか使ってくれということで、厚浜木材もやっています。スギの中断面の柱などは函館方面からの注文ですが、スギで学校、駅舎を建てるようですが、地域の製材工場があまりやる気がない。ラミナも相当挽かなければならないようだが挽きたがらない。要は採算が合わないようです。トドマツを挽いて東北の被災地に持って行く仕事が多く、スギを使おうと思っても話に乗ってこないと苦労するようです。

■厚浜木材の事業の取り組み経緯

厚浜木材はそのようなことをやりながら、ログハウスや公園の整備、環境省関係の色々な木道、知床の木道も全部やりました。3億円ぐらいの木材と人件費をかけてやりました。釧路湿原国立公園もほぼ100%厚浜木材と丸善木材でやりました。昭和58年頃のラムサール国際会議が開催されたあたりからやり始めましたが、本州の大学の先生、学生が泊まりがけで、何故木道が意外と腐らないか、本州はシロアリで腐るということで釧路に来て一緒に懇談したことがあります。丸太を点の組み合わせでボルトを締めているから腐らない。その上に床材を張るから、それもくっついて腐る。私はその上に板を張るときも、これも点だから水はけが良い。彼らはこのような施工方法が一番長持ちするという結論でした。薬剤は現在ACQですが、当時はCCAで毒性がありましたが、やはりイギリスの会社のいう30年は持ちますというのが本場で、30年持ちました。30年以上は持つと思います。防腐処理は土中に埋める部分だけをやるのではなく、全部やります。うちでは40年前にやった牧柵は、トドマツの12cmぐらいの心持ち材ですが、未だしっかりしています。持つもんだと思います。

厚浜木材では角ログをやってきました。今でもやっています。その後、酪農・畜産の牛舎や豚舎をやりました。こういうものはやっぱり環境的に木の中に住むことが最高だということが農家の人もみんな分かっています。ただ、鉄骨より高いという認識が強かったので我々もそれに対して色んなコストダウンを図りながらやっています。1棟500万、同じものを建てたら500万円木の方が高いといわれます。でもその500万の差は、税の関係だとかそういうもので見ていくと10年経つともうほとんど鉄と同じですと説得しています。それと牛は言葉をしゃべりませんが、牛は木の方が良いと言っています。牛舎に100頭も一気に夕方入ったときのその汗と湯気が上に上がるんです。上に上がると今度鉄板からポタポタ落ちてきて牛に当たります。その野地板をカラマツにすると、とりあえずは吸ってくれます。そういう良さがあるので、それをPRしながら次々と牛舎をやるようになりました。お陰様で去年も相当量やりました。去年も成績が良かったから3%配当し、今年もまた春先から順調に仕事があります。東川の学校から始まって、浦幌役場の物件で育成舎、それが終わったら北見枝幸に大きな牛舎を2つ建てます。ほかに別海に大きな牛舎が1つ待っています。また、今月末には江別酪農学園大学の入札が今年で3年目になりますが、牛舎と豚舎、鶏舎と3つやります。理事長、学長先生が木好きで、最初にやった牛舎がとても良いということからのようです。びっしりですから儲けるように思われがちですが、意外と儲からないんです。人を使って建物を建てるというのはなかなか難しいんです。ある程度自分で最初から最後まで作るというのは意外と経費がかかるんです。人がいないというのが問題になりますが、こっちから全部連れて行くわけにも行かない。こちらの方が仕事にならなくなる。それで札幌の方で探しますが向こうは人件費が高いんです。そういうことで経費が結構かかります。

■力を入れている木造公共建築物

今、力を入れているのは公共物件の建物と牛舎、公共工事では足寄の子育て支援センターとかをやる予定です。弟子屈にもカラマツで建築を予定しています。これらの建物は木大断面木構造です。なかなか組み立てまで行ける工場というのは、道東の1社と厚浜木材しかありません。大断面は作ったけれど、穴空けて現場に乗り込んでクレーン使って組み立てできるのはこの2社しか今のところ無いんです。伊藤組木材が無くなりましたが、やっぱりリーダー格でしたから色んなノウハウを厚浜木材も厚岸木材工業も

頂いてきました。



林業・林産業従事者研修センターハウス外観

そういう形でこれからも進んで行くし、道内全域どこでも行きます。北見枝幸であろうが函館であろうが行きます。今まで東京や横浜のど真ん中で仕事してきましたから大丈夫です。

建築における「木造化」「国産材化」という時代の要請は、「低炭素社会」を実現するための必要不可欠な前提として多くの人に認知され現在ニーズが高まっています。そのニーズに応える建築例として、2010年浜中町茶内に建てた林業・林産業従事者研修センターハウスは、木造平屋建てですべて地域産材のカラマツ、トドマツを利用してあります。その内容を幾つか紹介したいと思います。



林業・林産業従事者研修センターハウス内部

①建物床面積：337.72m²②木材使用量：94m³③設計者：(株)長谷川建築設計事務所④壁パネルユニット：柱間に土台から桁まで大型の壁パネルを工場ユニット

ト化し、現場作業の省力化と工期の短縮化を図っています。⑤研修室に配置されている平行弦ラチス梁、ホールには懸垂張弦梁とカラマツ集成材をふんだんに使用しています。⑥建物正面外装の縦格子は厚さ35mmの板材（巾250mm・長さ2700mm）を長さ方向で斜めに切り分け、縦に傾斜した格子として用い彫りの深い表情を与えています。外構資材としてポーチ、スロープ部に木レンガ、建物周囲にウッドチップを配しています。⑦外装は厚さ14mmの窯業系サイディング貼り、厚さ15mmカラマツ板材の大和貼り、カラマツ材の壁パネルで構成しています。この外装材に配色を施し、金属板、サイディングなどとの組み合わせで単調な建物形態の外観に変化と調和を図っています。⑧内装はカラマツ・トドマツ羽目板を使用、開口部枠はトドマツ集成材を使用する等、温もりのある仕上げにしています。⑨床は厚さ30mmのカラマツフローリング材、床材としての堅さを保ちながら広葉樹材では得られない暖かさがあります。また、テーブル天板もカラマツ集成材で製作し、新たな可能性を狙っています。

今回の取材では、丸善木材(株)社長の木材利用拡大、木材産業の活気に結びつく貴重な話を伺いました。また、人材育成の面でも当時入ってきた新入社員の方々がおかげさまで立派に育ちましたとの話を聞き、社長の人望、そして本当のやる気度を強く感じたところです。厚浜木材加工協同組合では、無垢材や集成材の地域産材活用で数多くの建築物を建てています。木の良さを常にアピールしたいとの一心で取り組んでいます。このことが地域の活力を生むと確信しますので、一段と充実した木材産業に邁進していただけたと思います。

今回の「くしろ木材の旅」は、釧路地方林業会の専務理事安田幹男氏の同行を頂き林業会の会長でもある鈴木社長を紹介していただいて取材が実現したものです。取材ご協力ありがとうございました。

(文責:北海道林産技術普及協会 植杉雅幸)